□ 評　論

宮　沢　昭　男

若者が「デストピア」を歌ったのは2016年だった。3.11フクシマから５年後である。パンデミック，ウクライナ，ガザ戦争の前のこと。それが先見の明なのか，それは知らない。

一方，音楽芸術家は，誤解を恐れずにいえば，緊急事態宣言解除から半年，2021年頭には動き，いち早くメッセージを変えた。評論メディアはそれを捉えたか，2022年の本欄で問うた。音楽会場で彼らの音楽に考えさせられ，勇気付けられた聴衆，観衆は少なくないだろう。私は，音楽芸術家たちがアフター・コロナを見据えて，さすがだと思った。それを文字にし伝えるのが音楽評論の役割と考える。

東京二期会理事長・清水雅彦は2023年秋，新シーズン記者会見で，「考えるオペラ」を今後の柱に据えると語った。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者キリル・ペトレンコは来日前，記者会見で自身のオペラ観を尋ねられ，「挿絵のようなオペラを楽しむ」だけでなく，「何か考えさせられる契機になる音楽をピットから届けたい」と語っていた。

「考える」は，21世紀の欧州クラシック音楽シーンのキーワードである。「聴く，観る」の旧来の座標軸に，３つ目の軸としてそれは加えられ，20世紀型の音楽ステージと峻別した。

日本の首都圏外でも，「考える」公演は少なくない。どう受け止められただろうか。

堺シティオペラ「愛の妙薬」（柴田真郁指揮，岩田達宗演出）では，読売新聞・青木さやか記者が次のように伝える。「このオペラが発表された1830年頃の欧州は，革命や戦争，疫病の流行で死や別離が身近にあった」（『読売』２月13日付大阪版夕刊）。コロナとウクライナの二重苦から，ドニゼッティの問題意識，非常時に人心を失うという時宜にかなった黙示を示した。

対して，『関西音楽新聞』2023年3月号第849号は，「実際の戦争とは関係がない。…戦乱とパンデミックに揺れる現代に読み替えるのは無理がありすぎる」（鳴原眞一）と，作曲者の生きた時代を捨象しにべもない。欧州の伝統作品をどうやって後世に引き継げると考えるのだろう。

鹿児島オペラ協会「蝶々夫人」（下野竜也指揮，岩田達宗演出）では，南日本新聞・林孝輔記者は，「蝶々さんを哀れな娘ではなく『武士の魂』を持った誇り高い女性」に描き，「節度という日本の美意識を示した」と記す。初演版に刻まれたであろうプッチーニの心の淵に思いを馳せた（『南日本新聞』３月19日付）。

ひろしまオペラルネッサンス「フィガロの結婚」（柴田真郁指揮，岩田達宗演出）では，中国新聞・渡辺敬子記者は次のように書く。「250年前に生まれた戯曲と音楽が，時代や国境を超えて今日に歌い継がれる。権力の横暴への怒り，虐げられた者への悲しみ，正義を求める連帯など，作品に込められたメッセージが心に響く」（『中国新聞』９月12日付）と，少ない字数で鋭く考察する。関係者は勇気付けられただろう。地方紙には文化面の拡充を求めたい。『音楽現代』11月号は，「ヒロシマから世界恒久平和を発信する」（編集部）と主催者のコンセプトにも言及し，公演の意義と舞台のオリジナル性を浮き彫りにした。

「全国共同制作シリーズ」は，オペラ演出の現代化をリードし毎回，考えさせられる。「田舎騎士道」「道化師」ダブルビル（アッシャー・フィッシュ指揮，上田久美子演出）は，マスカーニとレオンカヴァッロのイタリア・オペラを，日本の関西の下町に描いた。日英字幕に関西弁も加え，歌手にダンサーも交えた。不貞，嫉妬，殺人が「通常の２倍を超える情報量。この美しい音楽が描いているのは，あなたたちの物語だと迫り来るエネルギーに圧倒された」と白石美雪（『朝日』２月16日付）。

山田治生は「音楽を聴くという行為が疎かにされそうな危険をはらんでいた」「ダンスも関西弁字幕も刺激的で，オペラとしては，もう少し焦点を絞った方が良い」と指摘する一方，演出に既成オペラへの挑戦状を感じ，別の作品の演出も期待する（『音楽の友』４月号）。

コンサートでも「考える」は増えている。

片山杜秀は，ヴァイオリンのコパチンスカヤのリサイタルで，シェーンベルクに「ナチスに追われたユダヤ人作曲家のやるせない叫び」を聴き取る。ベートーヴェンのソナタからは，ナポレオン戦争の「屍体が埋まっている」と敷衍し，「狂気の時代に正気を取り戻させようと祈って弾いて踊っているに違いない。真に今日的な音楽家」と，コパチンスカヤの本質に鋭く切り込んだ（『朝日』３月30日付）。

読売交響楽団は，ヴァイグレ指揮により，アイスラー「ドイツ交響曲」を日本初演した。ヒトラー・ナチズムを告発した作品である。舩木篤也は，「事件と言うべき一夜」という。第４楽章の歌と楽団から「いつの世にも牙を剥き得る国家権力」を想起する。「作品，演奏者，それぞれの負う歴史が交わって痛切な現在性を獲得」「忘れられた作品の蘇演として，これ以上のものはない」（『読売』11月10日付）。

片山杜秀も，「正義面をして病院さえ打ち壊すファシストをどうすれば倒せるか」「ディストピアへの抵抗の響きを辛辣に鳴らして倦まない」「作曲家の焦燥感が聴く者に乗り移る」「時宜を得た稀代の凄演」（『朝日』11月２日）など，音楽と社会，過去と現在を縦横無尽にクロスさせ，読響のメッセージを読み解いた。

東京二期会「ドン・カルロ」（ロッテ・デ・ベア演出）は東京公演初日，執拗なブーイングに見舞われた。孤独な独裁者，政治と宗教の対立の歴史物語を，現代の難民や軍事的対立に演出したためだろう。だが，松平あかねは書く。「近未来へ読み替え」「中東の軍事衝突直後のせいか，…異常性も，より生々しく感じられる」。高水準の歌と演技が「癖ある人物像」を描いたとする（『読売』10月20日）。鈴木淳史は，権力システムの中で人間崩壊するさまが直裁に演出されたという。「現代的なギスギスとした空気がオペラ全体を覆い尽くす」と高く評価する（『朝日』10月26日）。

書籍では，ジェラルド・グローマー著『「音楽の都」ウィーンの誕生』（岩波新書）は，そうしたオペラ演出のモダン化を「つまらないマンネリ化」とする一方，古典作品と「現在の社会的・文化的事情に照らし合わせ，接点を探る」よう提唱する。「作品に深く入り込む過程から」新しい意味が生まれるという。本書は，18世紀後半からウィーンがなぜ優れた音楽家を引き寄せたか，その革新性を探る。当時の旅行記や社会事情に，ウィーンの音楽文化の発展の必要条件を歴史的，社会的に解明する。

ジョン・マウチェリ著『二十世紀のクラシック音楽を取り戻す』（松村哲哉訳，白水社）は，20世紀ファシズムの禍根を詳らかにする。第１次，第２次世界大戦，戦後冷戦も含め，芸術音楽がいかに弊害を被ったか。ファシズムは，調性とリズムの型を破れば「退廃芸術」の烙印を押し，スターリンにいたっては音楽に分かりやすさを求めて弾圧した。その桎梏から私たちの耳を解放し，音楽のダイバシティーを考える書といえる。